日本における発音記号の扱いに関する問題
― 辞典と教科書 ―

Problems of Phonetic Alphabets in Japan: Dictionaries and Textbooks

河内山 真理*　　有本 純*
Mari KOCHIYAMA　　Jun ARIMOTO

抄　録

本研究では，発音を表記する方法について，英和辞典や発音辞典，英英辞典や音声学の専門書，中学校検定教科書等を，母音を中心に，比較・分析し，どのような表記方法を用いているか明らかにした。日本・イギリス・アメリカの表記方法の差とそれによる影響について，英語音声学・英語教育・学習者の立場から考察を行った。また，表記の不統一は指導者にも学習者にも混乱を生み出す。高校までは統一表記を導入し，代表的な英音と米音等の発音については，電子辞書の音声に格納するのが望ましい。学習者に対しては教育の現場での適切な指導や，特に小学校教育における正しい音声と文字・綴りを結びつける指導が望まれる。

Ⅰ．はじめに

日本国内で出版されている英語の辞典には，英単語の綴り字の次にその単語がどう発音されるのかを示している。また，中学校の検定教科書も，新たに学ぶ単語を本文横にリストアップし，綴り字と発音記号を載せている。このように，英語学習者にとって，発音記号は見慣れたものであるが，記号がどのような音を示すのか，体系的に学ぶ機会は少なく，中学校用検定教科書にも解説が掲載されていても，授業で取り上げられていることは少ない。

また，発音の表記法も，小学生や中学生の英語初心者向けの英和辞典ではカタカナ表記，中級以上でいわゆる「発音記号」になっているが，それぞれの表記法には差異があり，user-friendly とは言えない。本稿では，辞典の，特に顕著な差が出やすい母音を中心に，発音表記を比較し，差異の実態を明らかにすることを目的としている。

Ⅱ．発音記号

2.　様々な発音記号

2．1　IPA

国際音声学会（International Phonetic Association）が言語音を書き記すために考えた記号体系を国際

＊　関西国際大学国際コミュニケーション学部　教育総合研究所学内研究員

音声字母または国際音声表記，国際音声記号（International Phonetic Alphabet，以下 IPA）と呼ぶ。発音を表記する記号としては，最初 1847 年版音声記号を用いたが，1887 年以降，改訂を繰り返し，現時点では 2015 年版が最新である(図 1 および図 2)。

IPA では，言語音を超分節音と分節音に大別し，さらに分節音を母音と子音に分けている。子音はさらに肺気流と非肺気流に分類される。主に英語学習で用いる IPA は，分節音の母音と子音である。子音も肺気流のみである。また，世界中の音声を表記するために，様々な補助記号も用いられる。

IPA で用いる記号は，ラテン文字とも呼ばれるローマンアルファベットを中心に，その他の文字から採択した記号を付加して構成されている。一般に発音記号と呼ばれるものは，この IPA または IPA を簡略化したものを指していることが多い。しかしながら，英和辞典などで採用される発音記号は，あくまで 1 つの言語を表記するために用いられており，IPA で示す音とは異なっていることがある。各種の辞典が用いる記号は，実用的な視点から，音声表記法と音素表記法を混在させた簡略表記法であることが多い。

THE INTERNATIONAL PHONETIC ALPHABET (revised to 2015)

CONSONANTS (PULMONIC) © 2015 IPA

	Bilabial	Labiodental	Dental	Alveolar	Postalveolar	Retroflex	Palatal	Velar	Uvular	Pharyngeal	Glottal
Plosive	p b			t d		ʈ ɖ	c ɟ	k g	q ɢ		ʔ
Nasal	m	ɱ		n		ɳ	ɲ	ŋ	ɴ		
Trill	ʙ			r					ʀ		
Tap or Flap		ⱱ		ɾ		ɽ					
Fricative	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ʂ ʐ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	ħ ʕ	h ɦ
Lateral fricative				ɬ ɮ							
Approximant		ʋ		ɹ		ɻ	j	ɰ			
Lateral approximant				l		ɭ	ʎ	ʟ			

Symbols to the right in a cell are voiced, to the left are voiceless. Shaded areas denote articulations judged impossible.

図 1.　2015 年版 International Phonetic Alphabet より子音図

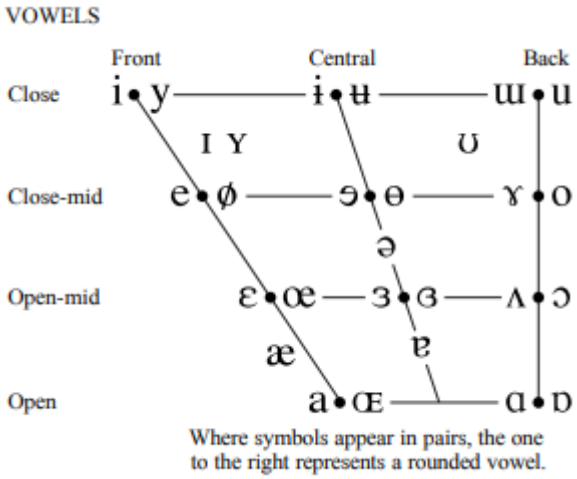

図 2.　2015 年版 International Phonetic Alphabet より母音図

2．2　日本で用いられる発音表記

2．2．1　英和辞典

日本では，一般的に IPA をもとにした簡略化した記号が用いられているが，英和辞典でも対象とする使用者や編集者の方針により，異なる記号を用いていることが多々ある。日本の出版社の英和辞典には，同じ出版社のシリーズでも複数のバリエーションがある。対象と想定される学習者のレベルに応じて，同じシリーズでも発音表記にも，違いがある。特に，中学校検定教科書では/ər/で表記する音は，表記法に差異が生じやすい。

例えば，学研が出している「アンカー」という名を冠した英和辞典の場合を表１に示す。

表１　アンカー英和辞典のシリーズ

英和辞典名（版）	収録項目数	主たる対象者	出版年	発音表記
ジュニア・アンカー(7)	17,100	中学生	2020	発音記号・カナ併記
アクセス・アンカー(2)	24,000*	高校生 「もっともやさしい英和辞典」	2016	発音記号・カナ併記
ニューヴィクトリー・アンカー(4)	54,000	高校生 「高校の基礎」	2019	発音記号・カナ併記
スーパー・アンカー(5)	72,000**	高校生 「日常学習から受験まで」	2015	発音記号(/ə^{r}/)
アンカー・コズミカ	90,000	高校生 「スーパー・アンカーの上級」	2007	発音記号(/ə^{r}/)

＊巻末の和英小辞典 8,000 項目含む　**巻末の和英小辞典含む

アンカー・シリーズの場合は，高校生の基礎レベルまで発音記号とカタカナ表記を両方掲載している。また，大学受験に対応する上位 2 種は，カタカナ表記は掲載していないが，中学検定教科書等で用いられる/ər/という音に関しては，r 音性を上付きの r を使って表示している。

近年は電子辞典が急速に普及し，紙媒体ではなく電子媒体の辞典を利用する学習者も多い。電子辞典に搭載されている英和辞典は大修館書店の「ジーニアス英和辞典」であるが，「ジーニアス英和辞典」の場合を表２に示す。

表 2　ジーニアス英和辞典のシリーズ

英和辞典名（版）	収録項目数	主たる対象者	出版年	発音表記
ベーシック・ジーニアス(2)	55,000*	高校生 「基礎からわかる」	2020	発音記号・カナ併記
アクシス・ジーニアス	75,000*	高校生 「中級の学習英和辞典」	2016	発音記号 (/ər/)
ジーニアス(5)	105,000	高校生 「学習英和の決定版」	2019	発音記号（/ɚ/）
ジーニアス英和大辞典	255,000 余	大学生～専門家 「ジーニアス辞典群の頂点」	2015	発音記号（/ɚ/）

*巻末に和英小辞典あり，項目数は英和のみ表示

ジーニアス・シリーズはすべて高校生以上を主たる対象としており，アンカー・シリーズと比べて収録項目数も多い。しかしながら，アンカーと同様，基礎レベルには発音記号とカタカナ表記を併用している。また上位 2 種は，中学校用検定教科書の/ər/を hooked と呼ばれる記号/ɚ/を用いて示している。

電子辞典では，音声が格納されていることが多く，学習者は発音記号が読めなくても，発音例を再生して聞くことができ，少しゆっくりとした発音で再生する機能がついていることもある。音声は 1 語について 1 種類しかないため，イギリス英語とアメリカ英語あるいはオーストラリア英語等で発音が異なっている語の場合，文字情報としての発音記号では示されていても，音声はアメリカ英語の発音例しか格納されていない。

また，英和辞典で用いられるカタカナ表記は，それぞれの編集者の方針により異なっており，それぞれのルールを理解しないと正確に読み解くのは難しい。表 3 は有本他（2019）からの引用であり，同じ発音について様々な異なる表記が存在していることがわかる。詳細は有本他(2019)を参照されたい。

表 3　初級者用英和辞典における母音のカナ表記*（有本他(2019)より再掲）

辞典	JC	NH	JA	P	H	C	MS	S	BG	AC
出版社	三省堂	東京書籍	学研	小学館	講談社	Benesse	旺文社	開隆堂	大修館	三省堂
apple	ア^{プる}	あプる	アプル	アプル	アプル	あープる	アプる	エアプウ	アプル	アプル
first	ふァ～^{スト}	ふア～スト	ファ～スト	ファスト	ファースト	ふぁ～スト	ふア～スト	ウ゜ア～スト	ファースト	ファースト
five	ふァイ^{ヴ}	ふアイヴ	ファイヴ	ファイヴ	ファイウ	ふァイぶ	ふァイヴ	ウ゜アイヴ	ファイヴ	ファイヴ

2．2．2　検定教科書

2021 年度から新たな学習指導要領が中学校で適用されているが，音声に関しては，大きな変更はない。そのため，中学校の検定教科書での発音表記についても前の学習指導要領に基づいた教科書と大きく違いはない。中学校の検定教科書は合計 6 種類で，数は変わらないが，前検定教科書との違いは，学校図書が啓林館に変わったこと，光村図書が Columbus 21 から Here We Go（HWG）へタイトルを変更したことである。また，2020 年度の採択数では，New Horizon（NH，東京書籍）が 1 位で，Hew We Go が 2 位，New Crown（NC，三省堂）が続くという結果になっており，光村図書のシェアが大きくなっている（日本教育新聞，2020）。

中学 1 年生の教科書では，各課の本文横に示される新出単語に発音記号は併記されないが，1 社を除き，2 年生からは掲載されている。Sunshine（S，開隆堂）だけは，1～3 年生とも新出単語の横に発音記号は記載されていない。しかしながら，Sunshine を含む 1 年生の教科書にも，巻末の単語リスト

には発音記号が併記されている。小学校英語の教科書では発音記号は記載されていない。

中学校教科書では，発音記号が記載されていても，その記号がどんな発音を意味しているのかという説明がある場合とない場合がある。1 年生の教科書では，NH，Blue Sky（BS，啓林館）では母音・子音共に記号と発音方法が載っている。New Crown，One World（OW，教育出版）では発音記号とそれを含む単語の例が一覧になっている。S では母音の綴りと発音の一覧が載っている。HWG にはそうした記載はない。また，綴りと発音については，フォニックスの視点から表記しているものが多い（NC，S，OW，BS）。

表 4　中学校検定教科書が用いる母音の発音記号

単語/教科書	NH	HWG	NC	S	BS	OW
bead/happy	iː i	iː i	iː i	iː i	iː i	iː i
big	i	i	i	i	i	i
set	e	e	e	e	e	e
act	æ	æ	æ	æ	æ	æ
balm	ɑː	ɑː	ɑː	ɑː	ɑː	ɑː
bomb	ɑ	ɑ	ɑ	ɑ	ɑ	ɑ
ball	ɔː	ɔː	ɔː	ɔː	ɔː	ɔː
book	u	u	u	u	u	u
fool/influence	uː u	uː u	uː u	uː u	uː u	uː u
bird	əːr	əːr	əːr	əːr	əːr	əːr
about	ə	ə	ə	ə	ə	ə
but	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ
age	ei	ei	ei	ei	ei	ei
ice	ai	ai	ai	ai	ai	ai
boat	ou	ou	ou	ou	ou	ou
out	au	au	au	au	au	au
boy	ɔi	ɔi	ɔi	ɔi	ɔi	ɔi
ear	i ər	i ər	i ər	i ər	i ər	i ər
dare	e ər	e ər	e ər	e ər	e ər	e ər
cure	u ər	u ər	u ər	u ər	u ər	u ər

表 4 に各検定教科書で用いられている記号を示す。表 4 からわかるように，語末の r 音性を示すのに，上付きの r を用いるといった差がなく，いずれの教科書も同じ記号を用いている。

2．3　アメリカ系辞典の発音表記

アメリカ系の辞典では，国際音声記号(IPA: International Phonetic Alphabet）を使用せず，独自の記号体系を用いていることは周知の通りである。また，アメリカ英語を表記した文献においても，IPA とは異なる記号が一部に使用されている。

表 5　アメリカ英語の母音一覧表

単語　/　辞典	RHW	L & J	C & M	LPD	EPD	IPA（米音）
bead/happy	ē /	iː / i	i	iː / i	iː / i	iː / i
big	i	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ
set	e	ɛ	ɛ	e	e	e
act	a	æ	æ	æ	æ	æ
balm	ä	ɑː	ɑ	ɑː	ɑː	ɑː
bomb	o	ɒ	ɑ	ɑː	ɑː	ɑ
ball	ô	ɔː	ɔ	ɑː	ɑː	ɔː (ɑː)
book	o͞o	ʊ	ʊ	ʊ	ʊ	ʊ
fool/influence	o͞o	uː	u	uː / u	uː / u	uː / u
bird	û(r)	ɚ	ər [ɚ]	ɝː	ɝː	ɚː (əː)
about	ə	ə	ə	ə	ə	ə
but	u	ʌ	ə	ʌ	ʌ	ʌ
age	ā	eɪ	eɪ	eɪ	eɪ	eɪ
ice	ī	aɪ	aɪ	aɪ	aɪ	aɪ
boat	ō	oʊ	oʊ	oʊ	oʊ	oʊ
out	ou	aʊ	aʊ	aʊ	aʊ	aʊ
boy	oi	ɔɪ	ɔɪ	ɔɪ	ɔɪ	ɔɪ
ear	ēr	ɪɹ	ir	ɪᵊr	ɪr	ɪɚ
dare	â(r)	ɛɹ	ɛr	eᵊr	er	eɚ (eə)
cure	yo͞or	ʊɹ	ʊr	ʊᵊr	ʊr	ʊɚ
hue	yo͞o	juː	uː	uː	uː	uː

Random House Webster (RHW)の特徴は，母音字の上に線を引くと，アルファベットと同じ発音をする（ā / eɪ/, ē /iː/），ドイツ語の umlaut を長音（ä / ɑː/, ô / ɔː /）などで用いている。要するに，フォニックスに近い発想で作成されており，音声学を学んでいない一般向けに発音表記がなされていると言えよう。

Ladefoged and Johnson (2015)では，/e/ではなく，/ɛ/を使用，/juː/を母音と認定，r 音声母音を/ɹ/で表現，/ɔː/ と/ɒ/を区別，/ə/を単独では使用していない二重母音は５種類＋r 音性４種類の計９種類である。

Carley and Mees (2020)では，/ʌ/は使用せず/ə/を用いている，長音符号を使用していない，/e/ではなく/ɛ/を使用，二重母音は５種類である。

LPD (Longman Pronunciation Dictionary)および EPD (Cambridge English Pronouncing Dictionary)発音辞典のアメリカ英語表記では，r 音性の母音以外は，両辞典ともに同じ記号を使用している。二重母音は共に５種類＋r 音性種類の計８種類であった。また，/ɚ/を使用せず，/ɜː (hooked)/を使用している点に特徴が出ている。

2．4　イギリス系辞典の発音表記

伝統的に発音辞典はイギリスで出版されているが，アメリカ英語も併記するのが特徴である。基本は IPA に従っているが，一部に異なる表記が見られる。

表６　イギリス系の発音表記

単語 / 辞典名	Roach	Cruttenden	LPD	EPD	IPA（英音）
eat / happy	iː / i	iː / i	iː / i	iː / i	iː / i
sit	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ
end	e	e	e	e	e
pat	æ	a	ɑː	ɑː	ɑː
car	ɑː	ɑː	ɑː	ɑː	ɑː
pot	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ
cord	ɔː	ɔː	ɔː	ɔː	ɔː
bull	ʊ	ʊ	ʊ	ʊ	ʊ
soon/influence	uː / u	uː	uː / u	uː / u	uː / u
earth	ɜː	ɜː	ɜː	ɜː	ɜː
about	ə	ə	ə	ə	ə
putt	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ
bay	eɪ	eɪ	eɪ	eɪ	eɪ
buy	aɪ	aɪ	aɪ	aɪ	aɪ
go	əʊ	əʊ	əʊ	əʊ	əʊ
cow	aʊ	aʊ	aʊ	aʊ	aʊ
boy	ɔɪ	ɔɪ	ɔɪ	ɔɪ	ɔɪ
peer	ɪə	ɪə	ɪə	ɪə^{r}	ɪə
pear	eə	ɛː	eə	eə^{r}	eə
poor	ʊə	ʊə	ʊə, ɔː	ʊə^{r}, ɔː^{r}	ʊə
core	ɔː		ɔː	ɔː^{r}	ɔə

Roach(2009)では，/ə:/ではなく/ɜ:/を使用しており，core は二重母音ではなく，/ɔ:/と長音化で表記している。したがって，二重母音は８種類である。

Cruttrnden (2014) では，/æ/を使用せず/a/を用いており，hair は二重母音ではなく，長母音/ɛ:/と表記し，Roach と同様に/ə:/ではなく，/ɜ:/を使用し，二重母音は８種類を認めている。

記号の特徴としては，アメリカ英語と音価が異なる（＝調音位置の違う）母音に対して，異なる記号を持いていることが上げられる。例えば，pat を/æ/以外に/ ɑ:/，go は/oʊ/ではなく/əʊ/を使用，二重母音であった/ eə, ʊə, ɔə/を長音化する表記に変わりつつあることであろう。イギリス英語では，アメリカ英語のように r 音性の母音を使用しない為，記号表には存在しない。しかし，EPD では一部の二重母音で r 音性を認めている。ただし，連結では r を追加して発音するのが一般的である。例えば，far away /fɑ: əweɪ/は/ fɑ:rəweɪ/になる。

Ⅲ.　発音表記の問題

3. 日本独自の音声記号

3. 1 英語音声学の立場から

これまでに，英語音声学の立場から指摘を受けてきたのは，緊張母音と弛緩母音の関係であろう。前舌母音の/i: ɪ/や後舌母音の/u: ʊ/が，多くの辞典や教科書では，/i: i/および/u: u/と表記されてきた。この日本独自の表記では，両者の違いは母音の長短であるという誤解を生み出してしまう。おそらく，日本語が音の長短で弁別する特徴を持つことが原因ではないだろうか。「おじさん対おじいさん（発音はおじーさん）」などがその例である。

しかし，英語音声学の立場からは，この２対の母音は，異なる音価を持っており，調音点も異なっている。緊張母音と弛緩母音という対立は，例えば前舌母音の場合，eat /i:t/ – it /ɪt/の母音とその長さを入れ替えると/ɪ:t/・/it/になってしまい，まったく別の発音になってしまう。

特に，弛緩母音の/ɪ ʊ/は曖昧に聞こえる調音になるが，日本語には曖昧に聞こえる母音が存在しない。したがって，明確に聞こえる/i u/を使用したのではないかと推測される。

最近の英和辞典では，緊張・弛緩の区別をする記号体系で表記するものも出版されているが，現場の英語教員が，この音声学的な母音の差異をどこまで理解しているかによって，教室での指導には不安が残る。

3. 2　英語教育の立場から

中高の英語科教員は，教職課程において英語音声学を履修しなくても，教員免許の取得が可能であること，および，教員自身の発音にも自信がないことから，発音指導に対する姿勢が消極的であることが，河内山・有本・中西(2013)，河内山・有本（2015, 2016）などで指摘されている。中学校英語教科書の新出単語には，発音記号が添えられており，巻末には発音に関する解説なども掲載されているが，実際にはほとんど活用されていない。

さらに，小学校では英語活動および英語の授業が開始されているが，教員の発音能力の問題があり，

英語音声学の知識も乏しく，指導はできていないのが実態である。電子黒板とデジタル教科書を使用すれば，英語の発音を再生することは可能で，それらに頼っての授業展開というのが実態である。

小学校の教科書に発音記号が掲載されていないこともあり，主にフォニックスを用いた発音指導が行われている。しかし，この手法は教員の発音が信頼できるものであることが前提であることから，主に綴り字と音の関係を指導しているに過ぎず，発音指導とは程遠いのが実情である。

3.3　学習者の立場から

英語学習者の立場から見ると，小学校の英語教育では発音記号は学ばないし，教科書にも掲載されていない。中学校に入って，教科書に発音記号が載り，おそらく初めて出会うと考えられる。しかしながら，教科書の巻末等に発音記号の説明が掲載されているものとそうでないものがある。授業内で説明等がなされればよいが，体系的な学習機会はほぼない。学習に用いる辞典にはカタカナが併記されていることが多く，また電子辞典で音声を聞くこともできる。また，現在の検定教科書では記載されている QR コードを用いて本文の単語や音声等を聞くことができるため，発音記号を学習する意義を感じられないまま中学時代を過ごすと推察できる。

高校以降に学習者用英和辞典を使うことになると，英和辞典の発音表記に戸惑うかもしれない。カタカナ表記のものもあれば，発音記号のみのものもある。学校で記号を学ぶ機会がなければ，発音記号は無視して，電子辞典の音声を参考にするか，綴り字からの推測でローマ字読みする程度であろう。辞典を買い替えた場合は，記号が異なることがあるため困惑する可能性がある。英英辞典を使えば，なおさら差異に戸惑うであろう。また，紙媒体の辞典には，巻頭や巻末に編集方針や用いられている表記についての説明があるが，電子辞典ではそのページは割愛されており，使用者が発音記号について知ることはできない。

Ⅳ　おわりに

現在の授業ではデジタル教科書や電子黒板，インターネット等の普及により，教科書の出版社が提供している音声を容易に聞くことができ，英語の発音に自信がない教員でも気楽に適切な音声を提供することが可能になっている。しかしながら，そういったあらかじめ準備された音声と，教室で教員が話す音声の差異を生徒はどう感じるだろうか。教員の発音能力や知識もよりよい教育にはやはり必要だと思われる。

また，電子辞典の音声には，アメリカ英語とイギリス英語のように異なる発音が明らかな単語には複数の音声を格納するのが望ましい。実際に TOEIC®でもリスニングで英語の変種を扱っており，現在の国際社会でのコミュニケーションに有用な情報であると考えられる。さらに電子辞典の特に中高生を主たる対象にする学習英和辞典には，編集方針や記号の説明等を紙の辞典同様に収録するのがよいであろう。出版社が高校生程度までの辞典には統一表記を用いるよう協働するのが望ましい。

実現には困難を伴うが，小学校でフォニックスを学ぶ際に正しい発音と綴りを結びつけて学習することができれば，中学校に入って発音記号と音を結びつけるのもそう難しくない。アルファベットと

異なる記号や，組み合わせた記号を覚えれば済むからである。実際に，学習指導要領では，小学校で「音声と文字とを関連付けて」，中学校では「発音と綴りとを関連付けて」指導することとなっている。小学校の英語学習において，綴り字の導入となるフォニックスを用いて正確な音声との結びつきを学ぶことに十分な時間を費やすことができれば，日本の英語教育は発音面で改善され，発音が改善されればリスニング力も，ひいてはスピーキング時の明瞭さ等も向上すると考えられる。

参考・引用文献

1) 有本純・河内山真理(2019) 「発音指導と発音記号：辞典使用の諸問題」『関西国際大学教育総合研究叢書』第 12 号, 101-112.

2) Carley, P. and I. M. Mees (2020) American English Pronunciation and Pronunciation Practice. London, Routledge.

3) Cruttenden, A. (2014[8]) *Gimson's Pronunciation of English*. London, Routledge.

4) International Phonetic Association (1996) *Handbook of the International Phonetic Association.* Cambridge University Press. 国際音声学会編，竹林滋・神山孝夫訳『国際音声記号ガイドブック』大修館書店，2003.

5) 河内山真理・有本純・中西のりこ(2013)「教職課程における英語発音指導の位置付け」外国語教育メディア学会 *Language Education & Technology* Vol.50, 119-130.

6) 河内山真理・有本純(2015)「現職教員の発音力強化に必要な要素の分析および教職課程履修者における発音記号の理解度」『関西国際大学コミュニケーション研究叢書』第 13 号, 34-41.

7) 河内山真理・有本純(2016)「教員研修における発音指導に対する教員の意識」『関西国際大学教育総合研究所叢書』第 9 号, 155-163.

8) Kochiyama, M. and J. Arimoto (2019) Phonetic Symbols in English Dictionaries for English-Learners in Japan. Paper presented to FLEAT VII (The Seventh Conference on Foreign Language Education and Technology), Tokyo.

9) Ladefogid, P. and K. Johnson (2015[7]) *A Course in Phonetics*. Stamford, Cengage Learning.

10) 日本教育新聞（2020/12/7）『令和 3 年度の教科書　小・中学校の占有率』，11 面.

11) 音の百科事典編集委員会編 (2006)『音の百科事典』丸善株式会社.

12) Roach, P. (2009[4]) *English Phonetics and Phonology*. Cambridge, Cambridge University Press.

Abstract

The purpose of this paper is 1) to investigate the way of transcription of pronunciation analyzing English-Japanese dictionaries, pronunciation dictionaries, English-English dictionaries, books on English phonetics and textbooks for junior high schools in Japan, and also 2) examine the differences among them and influences to the Japanese leaners of English from an English phonetics, English language teaching and learners' points of view. Publishers need to set "standard" transcription for primary, junior, and high school students. Teachers should teach how to read those transcription. Especially in primary school they should teach proper pronunciation using phonics, then students easily learn the spelling and pronunciation in junior and senior high schools.